

プラス1



～いつもの支援を一工夫～

岐阜県立東濃特別支援学校
地域支援センター通信
No. 39 (H30. 6月号)

残りあとわずか！ センターの機能研修会！



前号のプラス1でもご案内しましたが、今年度のセンター的機能研修会(公開講座)は、2名の先生方にご講演していただきます！現在までに、たくさんの皆様に申込みをいただいております。ありがとうございます。ご検討中の先生は、急いで申込みをよろしくお願ひします！詳しくは、本校ホームページをご覧ください。

第1回 7月27日(金) 受付13:00～ 定員120人

湯澤 正通 先生 (広島大学大学院教育学研究科教授)

▶ワーキングメモリ理論を踏まえた子どもの学習支援

ワーキングメモリは「脳の黒板」にたとえられます。「脳の黒板」が小さいと一度に覚えておける情報が少なく、学習に遅れが生じます。そのような子どもをどのように支援したらよいのでしょうか。ワーキングメモリの基本的な考えを説明し、それを踏まえた子どもの支援方法を解説します。

第2回 7月31日(火) 受付13:00～ 定員120人

伊田 勝法 先生 (静岡大学大学院 准教授)

▶発達障がいと不登校・ひきこもりの関係を考える ～インクルーシブ教育システムの視点から～

「不登校」「ひきこもり」と一括りにしても、その実情は一人ひとり異なるという見立てが大前提として必要だと感じています。何か一つの原因で不適應に至るとは考えにくく、おそらくは複数の要因の連鎖や重複が見られ、それゆえに実際の対応を個別に考えなければならない難しさがあると思います。発達障がいのことは視野に入れつつ、しかし診断の有無にはこだわらず、子ども本人のニーズと保護者の困り感に寄り添うことなど、これからの学校教育に求められていることについて、発達や適應に関する心理学の視点も含めて提案したいと思います。



実りある「福祉事業所による合同説明会」でした！



地域と保護者、学校が連携を深め、子どもたちの支援の質を高めていくことを目的にした合同説明会。今回で2回目となり、保護者の方も目的をもって参加され、生徒の進路についての学習の場になり、つながりが広まっていくことが実感できた会となりました。多数のご参加、ありがとうございました！

放課後等デイサービスは、自分が行っている以外にも、いろいろなところがたくさんあることを初めて知りました。(高等部生徒)

合同説明会でたくさんの事業所の説明を聞いて、事業所によって作業内容、作業時間が違って、いろいろな事業所があるなと思いました。(高等部生徒)

前回も参加していたので大体のイメージがつかめていて、事前に話を聞きたい事業所をピックアップして効率的に動けたのでよかったです。(保護者)

実習に入る少し前だったし、進路についてのいろいろ考え始める時期だったので、聞きたいことが細かく聞けるいいタイミングでもありとても助かりました。(保護者)

たくさんの方が、ブースに足を運んでくださいました。近い将来や遠い将来を不安に感じている保護者さん、どんな作業があるのかワクワクしながらメモを取り一生懸命聞いてくださる生徒さんと対面できました。この先において「途切れない支援」を関係者の方とともに連携していきたいと考えています。(事業所)





支援の失敗を、子どもの能力のせいにしていませんか？

手を変え、品を変え、いろいろと手立てを講じてみるけれど、うまくいかないことがあります。そのとき、「この子はちっとも覚えてくれない」「この子にはこの学習は無理だ」などなど、支援のうまく行かなさをあたかも子どもの能力のせいにしていないでしょうか。ここで大事なものは、支援の振り返り、つまり分析です。例えば、こんなチェックはどうでしょう。常に自分の支援を評価、分析、改善することを当たり前に行いましょう。もちろん、よかった支援はさらに強化する試みを行いましょう。

＜チェック表の例＞

- 課題の内容は適切だったか。
- 課題の量は適切だったか。
- やり方は分かっていたか。
- もっと前のところでつまずいていないか。
- 子どもの得意なところからさせているか。
- 事前の言葉かけは適切だったか。
- ざわついた環境ではないか、好きなものが目に入ってしまう環境ではないか。
- 「分からない」「できません」「教えてください」と言えているか。



困難さの背景を見極めていますか？

さて、支援の方針や目標を明確にするためには、子どもへのアセスメントが必須です。アセスメントというと発達検査が浮かぶかもしれませんが、そうではなく、行動観察が重要なポイントです。その子に対して期待される行動が起こらない問題、あるいは不適切な行動が起きている問題を把握することがスタートです。どのような状況でどのような

行動が起こり、どのような結果が伴ったのかを情報収集します。好ましい結果が得られるには、どの段階でどのような対応をしたらよいのか、解決策を考えます。つまり、**問題行動の背景（原因）**や前後の状況を探るというプロセスが**重要**なのです。

問題行動が起きてからの事後的な対応ではなく、ポジティブな支援、つまり未然に失敗経験を防ぐ手立てを講じるためにも子どもの問題となる行動のデータの収集と、それらを用いての評価、修正を行うプロセスに取り組みましょう。

